

COLUMN

資格取得にとどまらない
新しい医療教育のかたち

■心理カウンセリング

児島氏は医療心理学協会を立ち上げ、薬の知識をもつ心理カウンセラーの養成も行なっている。薬剤師にとって、患者の話を聞くことは服薬指導と同様に重要。よりよい医療提供のためのカウンセリング技術の指導も行なっている。



■薬剤師生涯教育

第一線で活躍できる薬剤師になってほしいと考えており、国家試験合格後に、公益財団法人・日本薬剤師研修センターの「認定薬剤師」の取得を支援している。「薬剤師は生涯学び続けるべきだ」というメディセレの理念に基づく。

■メディセレ薬局開局

薬学部の修業年限が6年になり、新制度の国家試験は実践に即した出題形式に変わった。実務分野を重視する傾向を受け、2012年4月に大阪市都島区にメディセレ薬局を開局した。「ただ薬を渡すだけでなく、患者様とコミュニケーションがとれる薬剤師を育ててきた。こうした薬剤師が活躍する『社会の保健室』として理想の調剤薬局を創りたい」という。



上司にわかってもらえない
それなら私がやるしない

師をめざす学生のために国家試験対策予備校を設立。わかりやすい受験対策の講義や手厚い就職支援だけでなく、認証心理カウンセラーによる精神面のサポートを受けられることや独自薬局の開局で実務経験を積んだ講師陣などが、学校の大きな特長だ。二〇一二年度は、大阪（本校）、東京、名古屋の三校で四百八十四人が学んだ。

児島氏は、神戸薬科大を卒業後に、薬剤師国家試験に落ち、薬局に勤めながら予備校の日曜講座を受けた。翌年、国家試験に合格して、そのまま大手予備校に再就職した。

勉強のやり方を間違っている人が多い、薬学は日々の生活と密接につながっている、ということに気づいてもらいたい。児島氏は、毎日、教壇に立ちながら、そんな思いを強くもった。心がけたのは「楽しく勉強してもらいたい」。身近な問題を「薬学」の視点から解いたり、語り合わせを用いて指導したりするユニークな講義は学生のハートをつかむ。すぐに「カリスマ」講師と呼ばれるようになった。

だが、「過度な拡大路線」を進む職場は、「教育は人なり」という児島社長長の信念にそぐわなくなった。勤め先に退職を伝えた。

ところが、そのとき、予期しないことが起こった。同じ思いを抱いた同僚講師たちが自分たちも辞職すると言いつつ出たのだ。児島社長は、彼らを引き止めたが、彼らの意思は強かった。時を同じくして、大学から出張講義の依頼が相次ぎ、試験に合格しなかった学生から学校をつくってほしいといわれた。

「私自身、起業する気は、まったくなかった」のだが、児島氏は予備校を立ち上げる決意を固めた。つくりあげたビジネスプランは、大阪市の外郭団体・大阪産業創造館から、将来性のあるベンチャー企業の事業としての認定を受け、大阪市長賞も受賞した。そして、二〇〇七年五月に会社を設立。七月に教室を開き、二カ月でオリジナルの参考書をつくって、九月から国家試験受

EMIKO KOJIMA

神戸薬科大学卒業。武庫川女子大学大学院薬学修士号取得。名古屋商科大学大学院経営学修士号取得（MBA取得）。内閣府認証心理カウンセラー。認定薬剤師。認定スポーツファーマシスト。2007年、(株)メディセレを創設。2008年、メディセレ教育出版(株)を創設。2012年、メディセレ薬局を開局。



児島恵美子

(株)メディセレ代表取締役社長

メディセレスクール

マイナスの体験から始まった女性ベンチャー社長の起業物語 「国の根幹である医療と教育を支えている自信と誇りを感じています」

薬剤師国家試験不合格の経験から、「教える立場」に立った女性が、薬剤師予備校を周りから後押しされて立ち上げた。メディセレの社長・児島恵美子氏は、人を引きつける魅力にあふれ、リーダーの資質と行動力を兼ね備えている。

写真撮影●高橋章夫

合格率九八%、
でも落ちた……

合格率九八%の試験に落ちた――。すべての始まりは、この「寄り道」を経験したからだ。

児島氏は、薬剤師をめざす学生のための予備校を運営する。「生来のポジティブな性格」で、二%に入った「落伍者」はいま、難局に直面する学生に「人生に無駄な経験は一つもない」と説いている。

「国家資格で将来は安泰」などの理由で薬学部は人気が高い。だが、薬学教育の世界は激動の時代を迎えている。修業年限が二〇〇六年度に四年制から六年制になり、薬学部、薬科大の新設も相次いだ。志望者の増加にともない、薬剤師になるための国家試験に合格できない学生が少なくない。

医師・看護師が不足する医療現場では薬剤師の専門知識やサポートが欠かせない。また、患者の診察や薬剤の処方方を医師が行ない、医師の処方箋を鑑査し、薬剤の調剤・投与を薬剤師が行なう「医薬分業」が進み、調剤薬局が増えて、裏方のイメージが強かった薬剤師が注目されるようになった。児島氏はいう。

「大学入學は易しくなったが、国試合格は難しくなった。つまり、薬剤師の道は『門戸』は広くなったが、『出口』は狭まったのです」

そこで、児島氏は二〇〇七年、薬剤

試験対策コースをスタートさせた。開校当初の学生数は百六十人。宣伝はしなかったが、カリスマ講師時代からの口コミで学生が集まったという。

周囲の後押しで学校をつくる――。児島氏には人を引きつける魅力があり、そして、リーダーの資質と行動力を兼ね備えている。「彼女ならできる」「彼女しかいない」という期待を集めたのだ。

自分のためではなく
世のため人のために

子供のころから、明るく、責任感が強かった。最初の国家試験の直前に発生した阪神・淡路大震災で被災した友人を自宅に招き、ともに机を並べ励まし合った。「世のため人のために」という両親の教えがあったという。

「学生や講師だけでなく、国家の根幹となる教育を通じて、社会の役に立ちたい」と、児島氏は力を込める。

薬学修士号、経営学修士(MBA)をもつ児島氏は今後、経営学と薬学の融合を図るという。厳しい経営環境にある薬局や病院に対して経営アドバイスをできる薬剤師を育てる考えだ。

児島流「ビジネス哲学」

人生に無駄な経験はない！